愛知淑徳大学論集―交流文化学部篇― 第９号　2019.３　129-151

観光パンフレットに見る昭和初期の観光地に関する一考察

（4）信越地方　―藤井務旧蔵資料を中心にして―

A Study of Sightseeing Areas in the Early Days of the Showa Era Through an Analysis of Tourism Pamphlets (4)Shin-Etsu Region －Focusing on the former collections of Tutomu Fujii－

谷沢　明

Akira　Tanizawa

Abstract

This paper was written as a tourism culture study aimed at exploring the situation of sightseeing spots and the way of sightseeing in the early days of the Showa era. In this paper, we take up the topic of the Shin-Etsu Region (Nagano Prefecture · Niigata Prefecture), and analyze tourism culture through tourism pamphlets. The main subjects are ski areas in the Shin-Etsu district. In 1911, skiing was introduced to Takada, Niigata Prefecture by Major Theodor Edler von Lerch, and rapidly spread to each region. Many ski resorts were set up along the Shin - Etsu line, where the railroad was open in the Meiji era. In the early Showa era, it became popular with skiers in hot spring areas (Akakura, Myoko, Ikenotaira, Seki, Tubame) at the foot of Mt. Myoko in Niigata Prefecture. Also in Nagano Prefecture skiing was transferred from Takada to Iiyama and Nozawa Onsen. In the early Showa era, Nozawa Onsen became known as one of Japan's leading ski areas. Furthermore, Shiga Kogen and Sugadaira Kogen were developed early in the Showa era, and as a result of the improvement of transportation, they emerged as prominent ski areas. Through the analysis of the tourist brochure, we can know the ski resort formation in the early Showa era.

はじめに

本稿は、昭和初期における観光地の状況、観光の在り方を探ることを目的とする観光文化研究であり、「観光パンフレットに見る昭和初期の観光地に関する一考察」（1）（2）（3）[1]に引き続いて執筆するものである。主資料とするのは、藤井務氏（大正５年〈1916〉生まれ、故人）[2]の旧蔵コレクションである昭和初期に発行された観光パンフレット類である。本稿に掲載する資料は、子女である安藤典子氏（『るるぶ』元編集長）から著者が譲り受けたものの中の一部である。

これらの観光パンフレット類は、昭和初期の観光文化を知るうえで、旅行案内書『鉄道旅行案内』、『日本案内記』、『旅程と費用概算』等の補完資料としてその存在は無視できない。前稿

では、我が国有数の観光地である日光・箱根、富士・伊豆、東京近郊を事例研究で取り上げ、観光パンフレットの解読を通して昭和初期の観光地の状況、旅客誘致の在り方、世相等についての考察を行った。これに引き続き本稿では、信越地方（長野・新潟県）の観光パンフレットを通して、主としてスキーの流行に伴って観光地として形成された所に焦点を当てる。

1.信越のスキー地

(1)鉄道の発達とスキー地

明治 44 年 1 月、レルヒ少佐（Theodor Edler von Lerch, 1869-1945）により新潟県高田に導入されたスキーは、またたく間に各地域に伝わり、大正から昭和初期にかけてスキー倶楽部が発足し、スキー場が整えられて、大いに普及する。そして、すでに明治期に鉄道が開通していた信越本線沿線の山岳地帯に早くからスキー場が設置された。その後、昭和 6 年の上越線開通に伴い、信越に加えて上越国境のスキー場も注目を集めるようになっていく。先ず、そのことを物語る『日本案内記中部篇』（昭和 6 年）[3]の記載を引用する。

「信越、北陸地方を初めその他の山岳地帯は、大部分積雪甚だ多く、積雪量は我国第一に位して居るので、スキー、スケート場ともまた甚だ多く、我国に於ける主要なるスキー場等は殆どこの地方に集って居ると云ってもよい」

この一文から、昭和初期、信越、北陸地方が日本有数のスキー地であったことがわかる。同書には昭和初期のスキー地の例として、野沢温泉付近、妙高山麓、上林温泉奥の岩菅山西方に広がる志賀高原、白根山脈に連なる猫岳山麓の菅平を挙げる。併せて、温泉豊富な野沢がスキー地として名声を挙げたこと、妙高山麓の赤倉、妙高、池ノ平、関、燕の諸温泉が冬はスキーヤーの雲集するところとなっていることが記されている。

ところで、新潟県高田にスキーが伝えられて以来、各地にスキー場がどのようにつくられていったのであろうか。レルヒ少佐が我が国にスキーを伝えてから 7 年後に発行された『鉄道旅行案内』（大正 7 年）[4]には、信越本線（高崎―新潟間）沿いにおいて 9 か所の「スキー練習場」が掲載されている。草津温泉、野尻湖、飯縄山付近、赤倉温泉、妙高温泉、関温泉、燕温泉、関山、金谷山の各スキー練習場である。また、妙高温泉分湯会社内に妙高スキー倶楽部、関山村に関山スキー倶楽部、高田市役所および高田偕行社内に日本スキー倶楽部があったことにも触れる。陸軍将校クラブである高田偕行社内に日本スキー倶楽部が置かれているのは、まさにスキー伝来の歴史を物語っている、といえよう。

スキーの普及は、明治 44 年 1 月、わが国最初のスキー講習会が高田第十三師団の将校を対象に開催されたことを契機とする。また、同年 2 月、新潟県下の旧制中学校等の教師を対象に民間人スキー講習会が開かれ、早くも学校教育にスキーが取り入れられていく。この講習会と時を同じくして発足したのが高田スキー倶楽部であり、大正元年には日本スキー倶楽部へ発展する。東京の学生も早くからスキーに注目し、明治末年から大正初年に学習院や慶応の学生が高田に赴いて指導を受けている。大正 3 年、日本スキー倶楽部東京支部が結成され、この倶楽部

の働きかけによって大正 8～10 年には帝大、早稲田、高等師範にスキー部が創設される。そして、スキー熱が高まりをみせていく。

続いて、大正末期の『鉄道旅行案内』（大正 13 年）[5]を見よう。大正 7 年に掲載された 9 か所のうち野尻湖、飯縄山付近、関山のスキー練習場が削除され、新たに飯山が追加された。そして、「飯山はスキー地としても知られて来た」との解説が加わる。大正 10 年に飯山鉄道の豊野～飯山間が開通したことがその理由であろう。また、赤倉温泉は「初心者は赤倉ホテルで指導する」と、スキースクールの存在を思わせる記述もみられる。なお、この時期、野沢温泉、志賀高原、菅平は未掲載である。

野沢温泉は、大正 12 年に飯山鉄道が延伸して野沢温泉駅（現、上境駅）が設置され、昭和期に入ると飯山に代わるスキー地として賑わうようになった。志賀高原は、昭和 2 年、長野電鉄の平穏線が信州中野駅から湯田中駅に通じることで近くなった。菅平は、昭和 3 年、上田温泉電軌の真田傍陽線が全通し、上田駅から真田駅まで電車が通じて行きやすくなった。このような交通機関の整備を背景に、昭和期に入ると、妙高山麓のスキー場に加えて野沢温泉、志賀高原、菅平がスキー場としてその名を知られるようになっていく。

(2)スキー場案内の小冊子

スキー熱の高まりに呼応して、昭和初期、鉄道省により「スキースケート場一覧」「スキー場案内」「スキーへ」等のスキー場案内の各種パンフレット・小冊子が発行される。これらは、昭和初期のスキー場の分布、変遷、特徴等を知るための手がかりとなる。

名古屋鉄道局発行（昭和 3 年 12 月）の「スキースケート場一覧」〈資料 1〉は、四折り 18.2×9.7cm のパンフレットである。これは、名古屋鉄道局所管沿線における当時のスキー場の所在地を知るとともに、スキー草創期の気分が伝わる一枚である。

一覧に掲載されたスキー場は、信越線方面 11、北陸線方面 12、東海道線方面 4 の計 27 スキー場である。信越線方面では、草津温泉・飯山・八ヶ岳山麓・鹿沢温泉・野沢温泉・野尻湖付近・妙高温泉・赤倉温泉・関温泉・燕温泉・金谷山が挙げられている。金谷山は、スキー発祥地の高田に所在するスキー場である。妙高・赤倉・関・燕はいずれも妙高山麓の温泉地で、そこに信越線方面のスキー地が集中していることが特徴である。

妙高近くの飯山、野沢温泉は、高田からいち早くスキーが伝わった地である。明治 45 年、レルヒ少佐の再来日により高田で二度目の大規模なスキー講習会が行われた。この時、旧制飯山中学校の体操教師が参加した。彼は飯山に戻るや、習いたてのスキーで城山の斜面をさっそうと滑り降りて、生徒たちを驚かせたというエピソードがある。また、校長に進言して練習用スキーを建具屋につくらせ、スキーを生徒たちに教えた。野沢温泉からこの飯山中学校に通う生徒もおり、間もなく飯山を経て野沢温泉にもスキーが伝播した。

なお、本パンフレットには、草津温泉（軽井沢駅から草津電鉄利用）、八ヶ岳山麓（小諸駅から佐久鉄道利用）、鹿沢温泉（上田駅又は滋野駅から三里半）といった信越線の駅から離れた所

も含まれている。

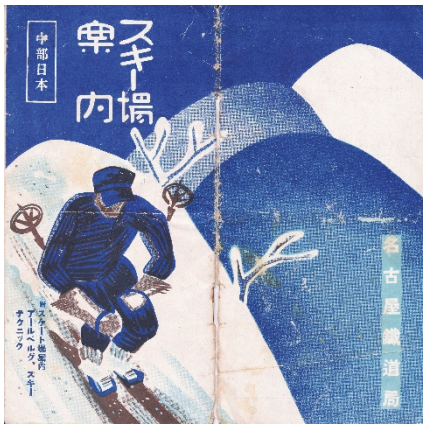
本パンフレットには、スキーとはどのようなものであるかを解説する次の一文が掲載されている。

「スキーは橇やかんじきと同じく踏雪具の一種で、これを以て雪上を自由に滑走する道具であります。冬の長い国の人々にとってはなくてはならない必要品であり、その他の人々には好個の運動具であります。スキーは習得するに難しいものかと云へば決してそうではなく凡そ歩くことの出来る人だったら誰にでも出来る、楽な興味の深い運動であります」

スキー伝来 17 年後のパンフレットにして、そもそもスキーとは何ぞや、からはじめる啓発的内容に驚きを覚える。そして、スキーが爽快にして滑走容易であることを強調するのである。なお、本パンフレットには、当時のスケート場についての情報が多数掲載されているが、これについては割愛する。

〈資料 1～3〉各種スキー場案内の小冊子（鉄道省）

〈資料 1〉



〈資料 2〉

〈資料 3〉

〈資料 1〉「スキースケート場一覧」（名古屋鉄道局、昭和 3 年 12 月）

〈資料 2〉「中部日本スキー場案内」（名古屋鉄道局、昭和 5 年 11 月）

〈資料 3〉「スキーへ」（鉄道省運輸局、昭和 4 年 12 月）

名古屋鉄道局発行（昭和 5 年 11 月）の「中部日本スキー場案内」〈資料 2〉は、18×9cm、16 頁の冊子である。この冊子は、中部地方にある百余のスキー場及び二十余のスケート場の内、温泉郷にあるもの、設備がよいもの、交通の便がよいものを選んで紹介している。本冊子発行の趣旨が序文で次のように述べられている。

「二十年前墺国人レルヒ氏によって初めて日本へ伝へられたスキーは今日長足の進歩をなし、スキー家は年々激増する状態であって、誠に国民保健上喜ぶべき現象である。本冊子は是等スキー家の案内の一助として発行したものである」

レルヒ少佐がスキーを伝えて、わずか20年の間に、中部地方だけでも百余に及ぶスキー場が設置されたことは、驚異的な流行ともいえる。注目すべきは、本文のうち6頁をさいてアールベルグスキーテクニックの解説文が掲載されている点であろう。掲載趣旨を序文で次のように謳う。

「スキーの興味はスキー術の上達によって大なるものがある。昨冬来朝したスキーの権威者シュナイダ氏の実演を目撃出来なかったスキー家の為めにアールベルグ、スキーテクニックの一部を解説し又初めてスキーを穿く人の為めにスキーの用意をのせた。多少の参考ともなれば幸甚である」

昭和5年3月、小原國芳（玉川学園創立者）の招きで来日したアルペンスキーの父として仰がれるH・シュナイダー（Hannes Schneider, 1890-1955）が与えた影響の大きさをうかがい知る一文である。彼は、信越では菅平、池ノ平、野沢温泉で講習会を行い、さらに青森県、北海道にも赴く。本冊子は来日7か月後の発行であり、アルペンスキーを普及させることによる旅客拡大を目指す意図が見て取れる。

本冊子には、中央線・信越線沿い19スキー場、北陸線沿い18スキー場、東海道線沿い3スキー場、登山スキー場5か所、その他13スケート場が紹介されている。中央線・信越線沿いの主なスキー場を一覧表に整理すると〈表1〉の通りである。

〈表1〉昭和5年当時の中央線・信越線沿いのスキー場

県名	スキー場（下車駅）
長野県	木曽福島★（木曽福島駅）、アルプス★（信濃木崎駅）、エビスマ原築場★（築場駅）、海の口★（海の口駅）、高ヶ入★（神城駅）、菅平（真田駅）、鳴尾★（傍陽駅）、飯山（飯山駅）、野沢温泉（木島駅）、上林温泉（湯田中駅）、志賀高原（湯田中駅）、伊勢見山御花山（柏原駅）
新潟県	妙高温泉・池の平温泉・赤倉温泉（田口駅）、関温泉・燕温泉（関山駅）、金谷山（高田駅）
群馬県	鹿沢温泉（真田駅）

★印は新興スキー場

この中に六か所の新興スキー場が含まれている。新興スキー場は大糸南線沿いに多い。ちなみに、昭和4年に大糸南線信濃大町～築場間が開通し、翌5年には築場～神城間が伸延開業していることをその背景とみて差し支えないであろう。しかし、上記大糸南線沿いのスキー場をはじめとする新興スキー場の大半は、その後発展することはなかった。間もなく、信濃四ツ谷駅（現、白馬駅）が開業（昭和7年）し、やがて白馬方面のスキー場が注目を集めるようになったからであろう。

本冊子には、中部地方の登山スキー場5か所が併せて紹介されている。乗鞍岳[6]、白馬岳[7]、立山[8]、白山[9]、木曽駒ヶ岳[10]である。最寄駅からの距離が記されているが、最も近い木曽駒ケ岳でも木曽福島駅・上松駅から17㎞、その他の登山スキー場がいずれも二十数㎞、最も遠い乗鞍岳

は筑摩電鉄島々駅から 34 ㎞も離れている。雪の時期に、それらの山々に到達すること自体並大抵のことではない。一般大衆が手軽に手に取る小冊子に、これら登山スキー場が鉄道沿線のスキー場と同列に併記されていることに、ある種の驚きを覚える。この記述こそ、まさに H・シュナイダー来日後の登山スキー熱の高まりを象徴するものといえはしないだろうか。同時期、山岳スキーを目的とする、乗鞍、立山、白馬、薬師岳が登山者の来訪が年を追うごとにしだいに増加していたことを示す旅行案内書の記述も見られることを指摘しておきたい。[11]

鉄道省運輸局発行（昭和 4 年 12 月）の「スキーへ」〈資料 3〉は、18.2×10.4cm、74 頁の冊子である。そこには、全国各地の主要スキー場 27 か所が掲載され、概要・交通・スキー季節・旅館・練習場等の案内文があり、充実した内容構成となっている。掲載に当たっての選定基準は、東京を中心として十時間内外で到達できるスキー地の大部分、遠隔地にあっては主要なスキー場である。このうち信越線沿い（上越方面も含まれている）のスキー場は 14 か所あり、掲載分の約半数を占める。それは、草津温泉、鹿沢温泉、上林・発哺温泉、飯山、野沢温泉、妙高山麓、妙高温泉、池ノ平温泉、赤倉温泉、関・燕温泉、高田市付近の 11 か所に、上越方面の赤城山、水上付近、湯沢温泉付近の 3 か所を加えた計 14 か所である。〈資料 3〉の扱いにおいても、これら信越線沿いのスキー地が、東京からのスキー客にとって大きな比重を占めていることがわかる。なお、H・シュナイダー来日前年に発行された本冊子には、登山スキーの掲載は見られない点を付言しておきたい。

2.越後のスキー地、高田と妙高山麓

(1)スキー発祥地高田

昭和初期、スキー発祥地である新潟県高田は、どのような状況であったのだろうか。『日本案内記中部篇』（昭和 6 年）[12]に「高田市付近スキー場」として次の記述がみられる。

「主なる練習場は市の西南二粁の金谷山付近一帯で斜面は比較的長大なものは少いが、変化に富み、ジャムプ台の設備があり、地形が競技場として適するので年々大会が催される」

競技コースは、金谷山に連なる薬師山、女山、男山、白旗山などの小丘を巡るものであった。スキー発祥地として知られる高田ではスキー製作が盛んで、年間数万台のスキーが製作され、近年、高田市の主要物産の地位を占めつつある、とも記されている。また、こんな記述が目を引く。

「市をあげてスキーの民衆化に努め、近時はスポーツの域を脱して、学生の通学、郵便集配を始め、全く実用的に発達普及されて居る」

高田市は、市をあげてスキーの普及に尽力していた。また、スキーは人々の日常生活に根を下ろし、通学や郵便集配にも利用されていたことを知ることができる。なお、明治 45 年に高田で開催されたスキー講習会には高田郵便局員三名が参加し、スキー技術を習得している。スキーによる郵便集配はその成果であろう。

次いで、スキー場の賑わいについて先に紹介した「スキーへ」（昭和 4 年）〈資料 3〉から「高

田市付近スキー場」の一文を紹介したい。

「スキー場付近には季節中臨時に二軒の簡易食堂や売店が出来てスキー汁で温かい飯を喰べさせる。高田市内には沢山の旅館がある。（中略）貸スキーの準備もあるが、団体などのためには高田市役所へ申込めば百台や二百台は都合してくれる」

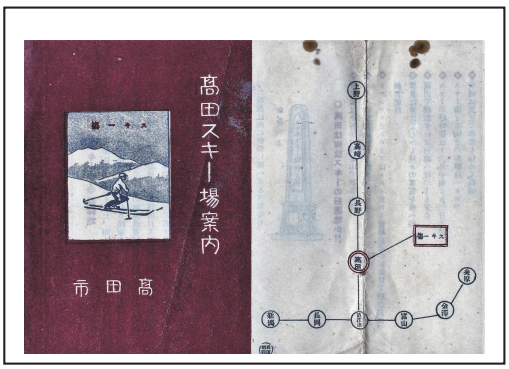
当時、熱々の汁物がスキー場で販売され、「スキー汁」なる呼称で人気を博していたことが面白い。なお、「スキー汁」とは、薩摩汁・豚汁を指す。高田市内には多くの旅館があり、金谷山の麓にも金谷楼と柳屋の二軒の旅館があった。記述に見られるように高田市役所が貸スキーの便宜を図っていたことは、市役所が率先してスキー普及に努めていたことのあらわれの一つであろう。

(2)「高田スキー場案内」（高田市、昭和 6 年）

高田市が発行した「高田スキー場案内」〈資料 4〉は、三折り、13×9cm の小ぶりなパンフレットである。発行年は記載されてないが、「昭和六年度の催しの大要」として 1～2 月の四行事が紹介されていることから、昭和 6 年の発行と見て差し支えない。冒頭は、「高田はスキーの発祥地」と題する次の一文である。

「スキーの理論と実際は高田で始まった、即ち明治四十三年十二月永井道明氏並杉松公使の御尽力が因となり陸軍省がスキー研究を当時の高田第十三師団に命じたので、時の師団長長岡中将は歩兵第五十八聯隊長堀内大佐（現中将）を委員長に参謀山口大尉（現少将）を委員に鶴見大尉（現大佐）等十二氏を専習将校に任じ五十八聯隊付となった墺国参謀少佐フォン、レルヒ（現少将）を教官として、高田市郊外金谷山頭に於てスプールを印したのが日本スキー史の第一頁である」

〈資料 4〉「高田スキー場案内」
（高田市、昭和 5 年頃）



長岡中将は長岡外史、堀内大佐は堀内文次郎、山口大尉は山口十八、鶴見大尉は鶴見宜信のことである。文中にある「スプール」とは、シュプールのことであろう。高田駅から南西方向約 3 ㎞に位置する標高約 145mの金谷山、これが我が国のスキー発祥地である。明治 43 年 11 月 30 日に交換将校として来日したレルヒ少佐が、翌 44 年 1 月 12 日に第十三師団第五十八聯隊の営庭でスキーを伝授し、金谷山で指導したのが、我が国におけるスキー発祥とされている。もっとも、レルヒ少佐来日以前に他地方にスキーがなかったわけではない。たとえば北海道の東北帝大農科大学でドイツ語教師がスキーを持ち込み学生に講義した等諸説があるが、正式な練習による普及という観点から見た場合、発祥地は高田が定説になっている。[13]金谷山には、スキー発祥 50 周年記念としてレルヒ少佐銅像が建立され、長岡

外史を筆頭に堀内、鶴見ら功労者 15 名の名が刻まれている。パンフレット解説文を続ける。

「以来二十有余年の今日に至る迄優良スキーの製作に将又各種スキー展覧会、競技会、巡回講演、指導員派遣、スキー大学等を開催し之が発達に不断の努力を傾注し来りたるの結果今や全国的に普及さるるに至った現況は洵に欣快に堪へざる次第なり」

スキー伝来以来、その発展に努めた結果、二十余年たった今、スキーが全国的に普及したことはまことに喜ばしく、気持ちの良いことである、と述べている。また、高田がスキー製造地になっていたことも記されている。

当時、高田では、スキー関係の各種イベントが行われていた。「昭和六年度の催しの大要」として次の記載がある。

「一月三日より九日迄スキー大学開設。部門は初学、中学、大学、研究の四部に別つ
一月五日より三日間スキー練習会（ジャンプも含む）
一月二十三、二十四、二十五日の三日間、全日本スキー選手権大会並明治神宮スキー大会予選会
二月二十一日スキー祭並市民スキー大会」

スキーの発展のため、高田市では上記の催しのほかに団体のスキー練習者に対して無料で指導者を派遣し、スキー場の雪量等について中央放送局その他から放送による情報提供を行って利用者の便を図っていた。本パンフレットには、「高田は何故スキーの好適地か」という 12 のコメントが挙げられている。

「練習場は金谷山、南葉山、朝日山等
スキー指導員は何れも斯界の権威者
シャンツイとスロープはレルヒ氏外多数権威者の折紙付で緩急自在、練習絶好
雪量は豊富でしかも種々の雪質を味へ得
高田で練習すれば何処へ行っても安心
スキーの好時期は十二月中旬より三月下旬
スキー場と市街との距離は一キロ半
交通は至便で物価も極めて低廉
スキー場の眺望は頸城平野を眼下に妙高秀嶺を負ひ日本海を隔てて佐渡島を望む、実に風光明媚と大自然に富む絶景の地
スキーや付属品の新調、修理は至極軽便
スキー場付近の旅館は金谷楼、同支店、音羽館、柳屋等で設備とサービスは百パーセント、賄料は三食付一円二十銭以内
貸スキーは何れも各旅館に設備してありて、料金は一日金二十銭」

レルヒ少佐折紙つきのシャンツェとスロープがあって、優れた指導者がいる。また、スキーの購入や、修理も簡単にできる。スキー場は市街地から近く、交通至便で風景もよい。高田のスキー場のあらゆる利点を謳っている。簡にして要を得たパンフレットである。

(3)妙高山麓のスキー地

高田と共に我が国屈指の豪雪地帯として知られる妙高山麓のスキー場は、妙高・池ノ平・赤倉・関・燕の諸温泉を控えており、昭和初期、関西東京方面から大勢のスキー客を集めて賑わっていた。先ず、昭和6年当時の「妙高山麓スキー場」（『日本案内記中部篇』所収）[14]の記述を紹介する。

「本邦有数の理想的スキー地として著名である。年々関西及東京方面から集るスキーヤーは万を以て算する」

「スキーヤーは万を以て算する」に、その賑わいぶりが伝わる。それも、東京や関西方面からの来訪者であり、当時すでにスキーリゾート地として成立していたことを物語る記述である。

再び、鉄道省運輸局発行の「スキーへ」（昭和4年）〈資料3〉から「妙高山麓のスキー場」の概要を記す。

「（妙高山の）長大な山腹から裾野にかけて、妙高、池ノ平、赤倉、関、燕などの温泉が散在して、付近には随所に好スキー地がある。我国でも最大の積雪量を有するといふ。この山麓一帯は又日本での最も理想的なスキー地として知られてゐる」

積雪量が多く、日本での最も理想的なスキー地、それが妙高山麓であった。記述を続ける。

「雄大にして壮麗な白雪に蔽はれた山嶽美の中に容易に入れるのと、温泉が豊富なのと、初心者にも、熟達者にも適する練習場が多く、且つ雪量が豊富で、長いスキー季節を持つなど先づ申分のないスキー場である」

雄大壮麗な山岳美と豊富な温泉に恵まれ、初心者から熟練者まで適応し、しかも長期間スキーができる場所、それが妙高山麓の特徴であった。しかし、積雪量が多すぎて没雪度が深いこと、日本海に近いため雪質に湿気が多いという欠点もあった。さらに記述を続ける。

「東京或は名古屋夜行で行けば、翌朝は雪深い北国情緒豊かなスキー地に入れるから日曜祭日などのスキーに便利である。年末、年始の休暇に東京、名古屋、京阪地方から訪れるスキー客は約数千人に達するといふ」

妙高山麓は、都会から便利なスキー地であることを説く。便利といっても、昭和4年当時、妙高山麓の入口である田口駅までそれなりの時間を要した。東京上野から約9時間半、名古屋から約10時間半である。それでも、年末年始の休暇には数千人のスキー客が押し寄せるほどの盛況をみたのである。

以下、妙高山麓のスキー地の特徴について、〈資料3〉から具体的に見ていく。先ず、妙高温泉付近の解説文である。

「駅とスキー場との近い点は他に例がない。短時間にスキーを楽しむ人のために最も便利である」

妙高温泉には旅館11軒があり、いずれも乾燥室、貸スキーを備えていて、約五百人収容できた。また妙高スキー倶楽部へ依頼すればスキー指導を受けることができた。

次に、池ノ平温泉付近スキー地の解説文を示す。

「妙高山の東山腹海抜七〇〇米の高原で、一帯は銀盤を広げた様な大雪原と化し、西に赤倉山、妙高山、前山聳え、南に黒姫山の火山円錐を望み、東に斑尾山、袴岳などの連嶺が繞り、展望の優れた広濶な地で到る処スキーに適する。（中略）此処から妙高山腹の『カヤバ』へ続く斜面は約八粁の間何等障害なき白皚々たる大斜面で、一気に直滑降が出来る」

池ノ平の特色は、何といっても長大な「カヤバ」の斜面を持つことである。そして、池ノ平温泉は、スキーの隆盛が生んだ温泉であり、駅から近く、しかも温泉の近くでこれだけの大斜面を持つ所は他に類例がない、と讃える。池ノ平には旅館 2 軒が建ち、約二百人収容できた。旅館には玉突きなどの遊戯設備があった。

三つ目に、赤倉温泉スキー場の解説文を示す。

「温泉は妙高山の半腹海抜七五八米の高原にあって、付近一帯が絶好のスキー場である。温泉がよく、山、海、湖の眺望に富み、展望美を以て知られる温泉である」

赤倉には旅館 8 軒があり、約八百人収容できた。近年著しくスキー家が激増して旅館の収容力が伴わず民家にまで泊まる程、とその人気ぶりを記す。また、大正 12 年以来、秩父宮、高松宮、朝香宮、北白川宮、山階宮各殿下をはじめ皇族方がたびたび練習にお成りになり、赤倉の名が世に広く知れ渡った旨も記されている。

四つ目に、関・燕温泉スキー場の解説文を示す。

「スキー地として古い歴史を持ってゐるだけに乾燥室や貸スキーの設備もあり、各旅館にスキーの達人がゐるから指導を受けるにも都合よく、人情が惇朴で、質素な処から学生に好まれ、各学校の合宿練習が盛んである」

海抜約 1,000 メートルの関温泉には、旅館 9 軒があり約五百人収容できた。眺望は池ノ平や赤倉に劣るものの、人情が惇朴で質素なため学生に好まれた。関温泉の奥に燕温泉があり、ここにも旅館 7 軒があり約百人収容できた。燕温泉スキー場について次のように記す。

「山深く入り込んでゐるので近来付近の賑かなスキー地を遠く逃れて主に熟達の学生が合宿する」

妙高山登山道入口に位置する燕温泉は、関温泉よりも標高がさらに高く、積雪量が多く、雪質もよかった。人気のスキー場の喧騒を逃れてスキーに打ち込む人々にとってふさわしいスキー場が、妙高山麓最奥の燕温泉であった。

(4)「妙高山麓のスキー」（池の平・妙高・新赤倉・赤倉温泉、昭和 7 年）

池の平・妙高・新赤倉・赤倉の四温泉が共同して発行した「妙高高原のスキー」〈資料 5〉は、二折り、15.5×10.8cm のパンフレットで、妙高山麓のスキー場の様子を知ることができる。発行は昭和 7 年と考えられる。理由は、本文記述に「妙高温泉付近村営スキー場に今年スキー神社を建立いたしました」とあり、その建立が昭和 7 年であることが挙げられる。

「スキー神社」とは、まことに珍しい神社である。祭神は、高雷神（高い山の龍神、雪・雨の神）、闇雷神（谷の神、雨・雪の神）、少彦名神（医薬・温泉の神）、酒井薫命の四神である。

[15]祭神の一柱となっている酒井薫は高田の日本スキー倶楽部に所属し、富士スキー登山（大正3年）の際に足を滑らせて転落遭難した、わが国最初のスキー登山犠牲者である。このスキー神社は、その霊を弔うとともに、当時、増加の一途をたどっていたスキーヤーの安全を祈願して建立された。建立したのは妙高スキークラブであり、妙高温泉土地株式会社、妙高温泉旅館組合の後援を得て、当初、「殿下スロープ」に創建された。現在、スキー神社は、関川の星野公園内に鎮座する。昭和15年の豪雪の際に社殿が倒壊したため、翌16年に遷座・再建されたものである。なお、星野公園は、大正2年に妙高スキークラブを設立した星野錫（妙高温泉土地株式会社社長）ゆかりの公園である。

〈資料5〉「妙高山麓のスキー」（池の平・妙高・新赤倉・赤倉温泉、昭和7年頃）

パンフレットの表紙は特異な山容をした妙高山を仰ぎ見るスキーヤーの絵柄で、裏面にスキー場略図が掲載されている。略図には、妙高山を挟んで池ノ平カヤバ、赤倉カヤバが記され、スキー場は、池ノ平カヤバ、殿下スロープ、妙高温泉付近、赤倉カヤバ、新赤倉の5か所に所在する。殿下スロープと赤倉カヤバにはシャンツェがつくられている。また、略図にはスキーコースが記載されている。[16]田口駅からそれぞれの温泉に至る里程も記されている。池ノ平へ三十丁、妙高へ六丁、赤倉へ一里廿七丁、新赤倉へ二十丁とあり、赤倉は駅からやや離れているものの、ほかは駅からさほど離れておらず、交通便利なのが妙高山麓のスキー場であった。各スキー場へは橇の便もあった。また、いずれのスキー場にも温泉があった。本文に謳う。

「赤倉　妙高　池ノ平　新赤倉温泉付近は他の何れのスキー場よりも降雪期早く量多く且粉雪にして東洋一のスキー場である　汗ばんだ体を温泉に浸して又一入の情緒　来たれ妙高の高原へ」

妙高山麓のスキー場は、降雪期が早く、しかも雪の質量とも良好で、温泉があって情緒もひとしおである、と自慢する。赤倉・妙高・池ノ平・新赤倉の四温泉では、貸スキーを各旅館に40～50挺ずつ揃えるとともに、宿泊料金を三段階に統一して誘客を図っていたことも記されている。さらに、設備について次のように記す。

「妙高温泉付近殿下スロープは村営シャンツェの設あり十五メーター乃至二十五メーター

を飛躍出来る　赤倉温泉にても今冬宮家御別邸裏に新設成り之亦十五メーター乃至二十五メーターを飛躍し得る」

妙高や赤倉にはジャンプ台の設備があることを宣伝する。前述したスキー神社が鎮座していた「殿下スロープ」は、妙高高原中学校グランド付近に位置し、地元でピリピリ山と呼ぶ山の斜面である。ここが、本パンフレットが作成された昭和 7 年当時の妙高の中心的スキー場であった。妙高のスキー場は、何度か移り変わっている。妙高スキークラブが設立されて間もなく大正 3 年に北国街道沿いに開かれたのが、馬場スキー場である。次いで大正 13 年に大天井スキー場が開設された。いずれも市街地に近く、畑の斜面を利用した素朴なものであった。昭和 5、6 年頃になるとこれに物足りない人があらわれ、ピリピリ山の斜面に妙高のスキー場が移っていった。その後、そこに高松宮殿下が来られたので、それを記念して「殿下スロープ」と呼ばれるようになった。[17]

赤倉温泉の「宮家御別邸」とは、久邇宮家の別荘（大正 14 年建築）を指すと考えられる。久邇宮家の別荘は温泉街からやや離れた高台に営まれ、跡地が残っている。赤倉におけるスキーの歴史もまた大正期にさかのぼり、大正 4 年に帝大教授に引率された学生一行がスキー合宿を行ったことが知られている。大正から昭和にかけての赤倉は、避暑地、別荘地として発展した所でもあった。さらに、昭和 10 年、妙高高原は鉄道省国際観光局から志賀高原、菅平とともに国際スキー場として指定され、昭和 12 年に赤倉観光ホテルが完成するや、その名を不動のものにした。

3.信州のスキー地、飯山・野沢温泉・志賀高原・菅平

(1)信州のスキー地

昭和期にはいると、交通機関の整備を背景に、妙高山麓のスキー場に加えて野沢温泉、志賀高原、菅平がスキー場としてその名を知られるようになったことを前述した。それら信州のスキー場の姿を『日本案内記中部篇』（昭和 6 年）から見たい。先ず、「野沢温泉付近スキー場」の記述である。[18]

「ジャムプ台その他の設備もありて競技に適するため、神宮スキー大会その他県下の大会が催された。（中略）近年関西及東京方面から多数のスキーヤーが集り、日本有数のスキー地として著名である」

スキー練習場は野沢温泉付近一帯にあり、長大なスロープはないものの、変化にとんだ地形は熟達者にも興味が持てる、とある。また、毛無山北面の上ノ平から東北に苗場山や上越国境の山稜を望むとともに、西に北アルプスから妙高・戸隠・飯縄などの信越国境の山々が見渡せ、雄大な展望をほしいままにした。

次に、同書による「志賀高原」の記述である。[19]

「あらゆる景勝の要素を備へ、夏はキャムピングの場所として、冬はスキー場として近年俄に世に知られて来た」

昭和初期、にわかに脚光を浴びたのが志賀高原であった。志賀高原スキー地の門戸をなす上林温泉は、千人風呂や温泉プールを備えて誘客に努めていた。志賀高原スキー地は坊平付近から展開し、旭山、琵琶池付近一帯にはスキー小屋があって最も練習に適する、と記されている。

三つ目に、同書による「菅平スキー場」の記述である。[20]

「展望美とスロープの広大なことと、雪質の良いことは此処の特色であらう」

雪質は信越国境付近に比べてはるかに良いと強調するとともに、近年、約二百人宿泊できる菅平ホテルが建設されたこと、付近の民家に約三百人、その他、青年訓練所にもスキーヤーが宿泊できる旨を記す。

再度、「スキーへ」（昭和4年）〈資料3〉から、飯山・野沢温泉・志賀高原の特徴を記す。なお、本冊子には菅平は収録されていない。先ず、飯山スキー場の記述である。

「高田地方と同様日本に於けるスキーの古い歴史を有し、スキーの製作も頗る盛んで最近では年数千台に及んでゐる。長野県下のスキー中心の地で、土地の人に最もよく普及されてゐる。地形その他競技場として適して居り、ジャムプ台の設備もあって、全日本的な大会が催され、又毎年県下の大会が開かれる」

飯山のスキーの歴史が古いこと、長野県下のスキーの中心で全国規模の大会が開催され、土地の人々にスキーが普及していることを挙げる。また、飯山が高田とともにスキーの製造地になっていたことを取り上げた記述も注目される。解説文を続ける。

「ただ旅館が少く温泉がないので滞在客に不便であり、近来飯山のスキーは野沢温泉に中心が移ったのも已むを得ないことであらう」

飯山はスキーの歴史は古いものの温泉がないため、昭和初期、スキーの中心が飯山から野沢温泉に移ったことを記すのである。スキー地として発展を遂げるためには、温泉の存在が大きいことを物語る記述である。

次に、〈資料3〉による野沢温泉スキー場の記述である。

「飯山町付近より積雪も多く、雪質も優って居り、加ふるに無色透明な硫黄泉が豊富に湧出し、旅館の設備や収容力も大きいので往時のスキーの飯山は全く野沢に中心を移した形である」

当時、飯山には旅館が五、六軒しかなく、それも設備があまりよくなかった。ところが野沢温泉には二十数軒の旅館があり、約八百人収容できた。さらに乾燥室や貸スキーを備えており、温泉は言うに及ばず、その受け入れ体制は飯山よりはるかに勝っていたことを記述からうかがい知ることができる。

三つ目に、〈資料3〉による志賀高原の記述である。本冊子が発行された昭和4年は、長野電鉄創立者の神津藤平が「志賀高原」を命名した年に当たる。ところが、本冊子にはまだ「志賀高原」という名は現れておらず、昔の呼称である「上林、発哺温泉付近スキー場」と記載されている。

「上林、発哺、熊ノ湯などは積雪多く、志賀山、岩菅山など二千米級の名山が東に聳え、

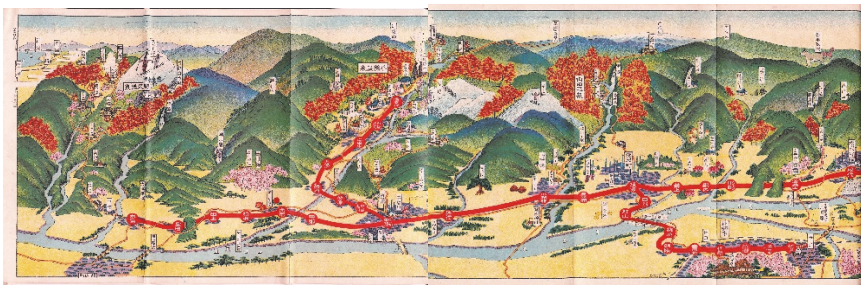
雪質もよくスキー地として優れてゐる」

平穏温泉を根拠地としてのスキーは東北の岩菅山、渋峠方面に入るに従って理想的になり、熊ノ湯、発哺温泉は優秀な位置を占めている、とある。旅館は湯田中に十数軒、安代に七軒、渋に十数軒あって約三千人収容できた。また、上林にも三軒あって二百人以上宿泊可能であった。前年（昭和 3 年）、ジャンプ台を設備するともに練習場を拡張した動きも記されており、これから志賀高原がスキー地として世に出ようとする息吹が感じられる。

(2)「野沢温泉名勝案内」（長野電鉄沿線案内刊行会、大正 15 年）

昭和に改元される半年前、長野電鉄沿線案内刊行会から「野沢温泉名勝案内」が発行（大正 15 年 7 月）された〈資料 6〉。八折り、18×9.5cm の野沢温泉を含む長野電鉄沿線の鳥瞰図を主に、裏面に「野沢温泉遊覧案内」の解説文を付す。図案ならびに印刷所は、名古屋市東区の澤田文精社鳥瞰図ポスター専門印刷部である。澤田文精社は、吉田初三郎の大正名所図絵社名古屋支部（大正 14 年解散）から独立した会社とされ、鳥瞰図の専門印刷部を設けていた。

〈資料 6〉「野沢温泉名勝案内」（長野電鉄沿線案内刊行会、大正 15 年）



[内容]沿革、交通、泉質と効能、入浴法、付近の名勝、物産、旅館、商店案内、鳥瞰図

鳥瞰図は、長野電鉄沿線を千曲川に沿って野沢温泉、平穏温泉、山田温泉などを際立たせて描く。「野沢温泉名勝案内」と言いつつ、なぜか野沢温泉は片隅で絵の主題になっていない。興味深いのは、志賀高原が開発される以前の平穏温泉周辺の姿である。湯田中から渋安代にかけて路線が延びているが、この路線は鉄道敷設の免許を得たものの、昭和 6 年に免許が失効となり実現しなかった幻の路線である。また、志賀高原は、琵琶池、熊ノ湯、発哺ノ湯を除いて、何も描かれていない。野沢温泉においては、スキー場と大湯、麻釜湯、川原湯、真湯、寺湯の五つの温泉と湯沢神社、健命寺が描かれている。遊覧案内の冒頭に、野沢温泉の特色を次のように記す。

「風色絢雅の佳境にして、（中略）風光雄大、勝景の地を占め、海抜二千余尺、土地高燥、空気清澄、水清冽真に俗塵を避けたる仙境である。夏は涼しく暑熱八十度を超えず、避暑の好適地として唱伝せられ、冬は暖くして避寒によく、殊に積雪にスキーを走らす快あり、

近来スキー場として好評がある」

野沢温泉は、風景が素晴らしく、俗世間から離れた地であることを称えるとともに、近年、スキー場として評判が高い、と記す。野沢温泉は古い歴史を持つスキー地であり、大正 12 年、野沢温泉スキー倶楽部が誕生し、翌 13 年にはシャンツェが建設され、大正末期から大学スキー部の学生が合宿に来るようになった。[21]「近来スキー場として好評がある」とは、このような状況を指すのであろう。しかしながら、本パンフレットは、スキーに関する記述は少なく、温泉、名勝地の紹介に力を入れている。遊覧案内を続ける。

「殊に温泉の湧出饒多にして、大湯、麻釜、川原の湯、真湯、寺湯、滝の湯、横落の湯、新田の湯、等に分れ湧出口二十五所を算へられ、湯量の豊富と偉効あるとは他に其比なく、養痾消閑の地であると共に四時を通じて入浴に適し、近年交通の便開けてより来遊するもの激増して、浴客実に年二十余万、真に天与の静養地である」

旅館は大湯 10 軒、麻釜 4 軒、川原の湯 3 軒、真湯 6 軒、寺湯 3 軒があった。物産はあけび蔓細工品、野沢菜などが知られ、あけび蔓細工の卸商 5 軒を数えた。交通の便が開けた野沢温泉は、当時、年間 20 余万人の浴客が訪れる信濃有数の温泉地を形成していた。飯山に代わって野沢温泉がスキー地として賑わう素地がそこにあったことは明白である。本パンフレットは、野沢温泉、志賀高原がこれからスキー地として躍進を始める直前の状況が彷彿され、その意味において貴重な資料といえよう。

(3)「平穏スキー上林」（長野電鉄、昭和4年頃）

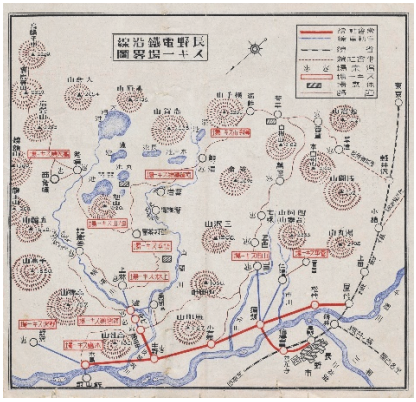
長野電鉄により発行された「平穏スキー上林」〈資料 7〉は、志賀高原におけるスキーの歴史を含む観光案内を内容とする 17.6×18.6cm、6 頁の冊子である。発行年は記載されていないが、後述する記述内容から昭和 4 年と考えられる。表紙は、両手を空高く広げたスキーヤーが山から滑り下りる絵柄、裏面に長野電鉄沿線スキー場略図が掲載されている。本文は、〈資料 7〉の内容で、8 枚のスキー関係の写真が掲載されている。注目される一枚は、志賀高原におけるヘルセット中尉一行の写真である。

ヘルセット中尉来訪の件が、「東洋のサンモリッツ」と題して次のように紹介されている。

「昭和四年二月、ノールウエー国の陸軍中尉ヘルゼット氏等一行三名のスキー選手が、日本に渡来し、我国内に於て優秀なるスキー場数ヶ所を巡遊し、その最後に我上林を来訪しました、（中略）恰も天気晴朗の日、山も谿も原も、白皚々雪の積ること上林にて四五尺、志賀高原にて五六尺。しかも表面粉雪にして、スキー登行に頗る適当なる折でありました」

オラフ・ヘルセット中尉（Olaf Helset, 1892-1960）は、スイスのサンモリッツ冬季オリンピック（1928 年） のノルウェーチーム監督を務めた人で、札幌の大倉山シヤンツェ（昭和 6 年完成）の設計に当たったことでも知られている。一行は、大倉喜七郎男爵と堀内文次郎将軍の紹介で、当初予定になかった上林を訪れた、と記す。

〈資料 7〉「平穏スキー上林」（長野電鉄、昭和 4 年）



[内容]平穏温泉、上林の四季、秩父宮殿下御来遊、東洋のサンモリッツ、上林スキー練習場、上林スキーの起源、世界的スキー場、長野電鉄沿線のスキー場、スキー交通の聯絡、スキー其他ご案内

飯山においてジャンプをすませて上林に到着した一行は、模範演技の前に、晴天下、粉雪を踏みしめて上林練習場からスキー登行を開始する。

「草津道を上り十二沢の練習場を踏み、波坂を上り坊平を見、沓打茶屋に至りて休憩し。それから旭山を登降し、志賀高原を縦横に滑走しました」

一行は、高天原から岩菅山に登山しなかったものの、志賀高原のスキー地としての優秀さを看取して、いかにも満足の体であった、という。同パンフレットは、ヘルセット中尉の言葉を紹介しつつ、平穏すなわち、志賀高原の素晴らしさをアピールする。

「曰く〔ここは東洋のサンモリッツであります〕と。サンモリッツは欧米に知れ亘りたる、スヰス国の最優秀スキー地、世界的スキー場であります。されば、我平穏も亦〔世界的スキー優秀地〕なりと確認されたのでありませう。是よりして、平穏のスキー地としての声価は大に高まりました。いや声価が高まったと云ふよりか実質が知られて来たのであります」

やや、芝居がかった文言とも言えなくもないが、ウインタースポーツのメッカとも言えるスイスのサンモリッツになぞらえて志賀高原を売り出そうとした意図がありありと読み取れる。

同パンフレットは、上林におけるスキーの起源についても触れている。要約すると、次の通りである。大正 2 年、横浜の機械商のドイツ人・キンメル夫婦がたまたま上林温泉の旅館・塵楼閣に止宿していた。彼はスキーの心得があり、スキーをやろうという話が起こった。そして、越後の高田に交渉してスキーを求め、キンメルが指導者になって練習を始めた。それが、この地のスキーの起源である、という。その後、村の有志が集まり、スキー仲間を集めて昭和元年に山の内スキー倶楽部を創設した。同 4 年、平穏スキー倶楽部と改称し、村役場に事務所をおいて、毎年、スキー大会が開催され、スキー熱は大いに高まった、と記す。

また、「秩父宮殿下御来遊」の一文も抜け目なく掲載している。ご来遊は、ヘルセット中尉が上林を訪れた6か月後の昭和4年8月であった。長野駅から長野電鉄に乗り換えて湯田中に降り立った殿下は、自動車で上林温泉まで行き、仙寿閣で昼食後、志賀高原に向けて出発した。

「ワイシャツ、リュクサックの御勇壮なる御扮装にて草津道を志賀高原に登らせられ旭山を御登降あり、横湯の深き谿を渡らせられて夕刻発哺御着、（中略）翌七日暁発哺御発高天原を経、原や沢や谷の上の山径を御跋渉岩菅山の頂上を御踏破…」

殿下は、志賀高原の旭山や北東部に位置する岩菅山に登山され、渋峠を越えて草津に出て、軽井沢から帰京された旨が記されている。スキーやラグビーなどスポーツ振興に尽くされた宮様として知られる秩父宮雍仁親王ご来遊の理由を以下に記し、結びとしている。

「秩父宮殿下には、以上御行程の平穏の山川の風景を、御賞讃あらせられ、且つ本年二月、日本に渡来せし、ノールウエーの世界的スキー選手ヘルゼット中尉が雪の平穏をスキーに跋渉し、大に賞揚した事を、かねて御聴取なされましたので、雪なき暑中にても、スキー場たるべき平穏、上林を御視察あらせられました」

「本年二月、日本に渡来せしヘルセット中尉」の記載事項から、本パンフレットの発行は、昭和4年とみて間違いないであろう。長野電鉄の信州中野～湯田中間が開業したのは昭和2年のことであった。同年、志賀高原の土地を所有する地域住民が「和合会」を設立し、長野電鉄と協働して志賀高原の観光開発が開始される。昭和4年に「志賀高原」と命名された地をスキーの好適地として売り出すために電鉄会社が作成したのが本パンフレットであり、世界的スキー選手や宮様の来訪を取り上げて、志賀高原の名を大々的に売り出そうとする意図は明白である。

裏面には、長野電鉄沿線スキー場として、11スキー場の所在地が記されている。掲載されているスキー場の中で、直接、電車・自動車で近くまで行けるのは、上林、野沢、山田、木島の各スキー場くらいで、昭和4年当時、志賀高原のスキー場までは自動車の便がなかった。湯田中駅から各スキー場までの距離は、上林二十五丁、坊平一里七丁、旭山一里廿丁、熊ノ湯三里、発哺三里、横手山四里であった。

志賀高原といえども、当時は、いたって不便な場所であったことが伝わる。本パンフレットには、その年の冬は、スキー客の便を図るため、上林温泉仙寿閣では貸スキーを取りそろえ、長野電鉄乗車券は5割引にする予定、と謳っている。大変な力の入れようである。本パンフレットは、観光地志賀高原が生まれる頃の様子がありありと伝わる一葉である。

(4)「長野電鉄沿線御案内」（長野電鉄、昭和12年）

長野電鉄発行（昭和12年2月）の「長野電鉄沿線御案内」〈資料8〉は、四折り、20.2×11.3cm、鳥瞰図を主としたパンフレットである。善光寺平から北信地方にかけての観光地を知るうえで参考になる。とりわけ、同社と地域住民の「和合会」が協働して開発した志賀高原や平穏温泉郷の記述に力が込められている。表紙は、雪に被われた志賀高原笠岳と上林温泉内温泉プール

である。本文は〈資料 8〉の内容で広く沿線各地の案内をし、写真 9 枚を掲載する。写真は、善光寺、平穏温泉八湯大観、夏の志賀高原蓮池、志賀高原志賀山、志賀高原熊ノ湯付近でのスキー、志賀高原渋池でのスケート、地獄谷の噴湯、長野電鉄電車内のハイカー、上林ホテル外観である。信濃を象徴する善光寺の写真を除いて、すべて志賀高原と同電鉄経営の上林ホテルを含んだ平穏温泉郷のものであり、「沿線案内」といいつつ、志賀高原を前面に打ち出していることは一目瞭然である。

「山は招く長野電鉄沿線」と題した鳥瞰図の作者は金子常光、印刷は東京の日本名所図絵社・小山吉三である。この鳥瞰図は、長野電鉄の長野～木島間および須坂～屋代間を主要範囲とし、上林温泉の上林ホテルを中心に、その背後に志賀高原を配置する構図である。上林温泉の位置する千曲川支流の横湯川に沿って湯田中、穂波、安代、渋、地獄谷、角間川沿いに角間の各温泉があり、志賀高原の奥地に熊ノ湯温泉、発哺温泉がある。これらが平穏温泉郷である。また、松川流域に山田温泉、遥か彼方の源流に当たる笠岳山麓に五色温泉、七味温泉があり、流域を辿る街道は万座温泉、草津の白根山方面に延びる。さらに、電車終点である木島の奥地に野沢温泉も描かれている。

〈資料 8〉「長野電鉄沿線御案内」（長野電鉄、昭和 12 年）

[内容]長野市、善光寺、野尻湖、須坂と菅平、山田温泉、万座温泉、白根噴火山、福島正則の墓、信州中野、高社山麓スキー場、平穏温泉郷と志賀高原、湯田中温泉、安代温泉、渋温泉、角間と穂波温泉、上林温泉、上林ホテル、地獄谷噴湯、丸池・旭山、志賀高原温泉ホテル、発哺温泉、岩菅山、熊の湯温泉、川中島古戦場、妻女山・狗ヶ瀬、飯山町と野沢温泉、鳥観図

平穏温泉郷に向かう電車支線の終点が湯田中、それより先は自動車道となり上林ホテルの下がバス待合所になっている。上林ホテルから九十九折の道が志賀高原に向けてついており、そこも自動車道になっている。志賀高原には琵琶池、丸池、蓮池、大沼池、長池、小池、三角池などが点在し、上林ホテル経営の丸池ヒュッテをはじめ志賀高原温泉ホテル、志賀ヒュッテの宿泊施設があり、多くのスキー場がつくられている。なお、岩菅山は、「秩父宮両殿下・竹田宮殿下御登山所」と特筆されている。

なお、同社は昭和 5 年に吉田初三郎の「長野電鉄沿線温泉名所交通鳥瞰図」[22]を発行している。吉田初三郎の鳥瞰図と金子常光の鳥瞰図〈資料 8〉を比較すると、構図は極めて似通っているが、〈資料 8〉は長野電鉄経営の上林ホテルをより大きく描き込み、志賀高原の名所をより詳細に表現している点が際立っている。

志賀高原について、次のように紹介されている。

「岩菅、白根、笠岳、横手、志賀の山麓一帯を志賀高原と謂ふ、高山、渓谷、原野湖沼、渓流、瀑布を以てした六里余方のパラダイスで道は拓け婦女子も容易に行かれ、馬、駕籠の便あり。春の花ハイキング、新緑とつつじ、蕨、筍狩りに、夏の登山、キャンピング、避暑に、秋は観楓の旅に、冬期は積雪多く国際スキー場となり旅の興趣百パーセント」

当時、開発が進みつつあった志賀高原には、積雪期以外は志賀高原温泉ホテルまでバスが運行しており、婦女子でも容易に行くことができる、と説く。なお、積雪中は、馬橇の便があった。本パンフレットは、志賀高原が鉄道省の国際スキー場に指定（昭和 10 年）された 2 年後の発行である。志賀高原は、新緑のハイキング、夏の登山・キャンプ、秋の紅葉と四季折々の魅力にあふれ、冬季のスキー以外にも多様な楽しみ方ができる所である、と宣伝する。

(5)「スキーの菅平と鹿沢」（上田温泉電軌、昭和 9 年）

志賀高原の開発開始と同時期の昭和 2 年、志賀高原南西に位置する四阿山麓の菅平において菅平スキークラブが結成された。それは、長野県知事が菅平を訪れ、その将来性に着目した年でもあった。菅平スキークラブ結成とともに、菅平スキー場が開設された。以来、菅平は発展を遂げ、昭和 10 年には妙高高原、志賀高原と並んで鉄道省の国際スキー場に指定されたことは、前述したとおりである。

上田温泉電軌株式会社発行（昭和 9 年 12 月）の「スキーの菅平と鹿沢」〈資料 9〉は、三折り、17.8×11.9cm のパンフレットで、昭和初期の菅平の様子を知るうえで参考になる。表紙は、スキーヤーの写真、裏面に別所温泉の紹介がある。本文中に載せた 6 枚の写真は、雪の四阿山と猫岳（根子岳）、上信越国境縦走コース、新鹿沢温泉付近のスキー場等である。

〈資料 9〉「スキーの菅平と鹿沢」
（上田温泉電軌、昭和 9 年）

[内容]菅平、鹿沢、上信国境縦走コース、菅平及鹿沢温泉付近地図、スキーのお帰りには温い別所温泉へ

地図を見ると、上田温泉電気軌道が別所温泉をはじめ、菅平方面では真田まで延びる。電気軌道が真田まで全通したのは昭和 3 年のことであり、菅平がスキー地として発展を開始しようとする時期と重なっている。菅平スキー

場の説明文を記す。

「菅平スキー場は、長野県上田市外長村にある海抜一、三〇〇米内外の標高を維持したる高原、上信国境にそそり立つ猫岳（二、一九五米）と四阿山（二、三三二米九）の頂上から、緩く曳いた大傾斜面で、その雄大なスロープは、雪の王者シュナイダー氏がスキスのシュワルツ・ワルドに彷彿たりと激賞した所である」

昭和５年３月、近代スキーの生みの親といわれるＨ・シュナイダーが来日したことを前述した。同月 19、20 日の両日、菅平において講習が開かれ、根子岳山頂から滑りおりる模範滑走が行われた[23]。その後、池ノ平、野沢をはじめ各地で講演や技術指導が行われた。なお、シュナイダー主演の映画「スキーの驚異」はすでに反響を呼んでおり、世界的スキーヤーが訪れることが菅平の名声を高めるうえで大いに役立ったことに違いない。

菅平高原ダボスの丘には、昭和 35 年、シュナイダー塔建設協賛会により、彼のレリーフをはめ込んだシュナイダー塔が建立された。この塔は、東に根子岳、南東に阿四山を望む見晴らしの良いスロープの上に立っている。

同パンフレットには、菅平スキー場までの交通案内が次の様に記されている。

「上田から真田まで電車、真田から菅平口までバス、そこからスキー場まで六粁、スキーを穿けば一時間で行けるが、馬橇に乗れば、老若男女如何なる人々でも、徒歩の辛さを喞つことなく、完全に乗物を利用して楽々とスキー場まで行かれる」

当時、真田から菅平口まではバスの便があったものの、菅平口から菅平まで６㎞は馬橇であった。馬橇に乗れば老若男女歩かず楽々とスキー場に行ける、と真面目に謳っている。宿泊設備として、菅平ホテル、高原ホテル、鉄道省山の家、旅館があり、付近の農家もスキー客を泊めており、約二千人の収容力があった。また、スキーの帰り道、別所温泉に立ち寄り、ひと汗流す人もいたとみえ、菅平ホテル前の旅行案内所では、別所温泉に立ち寄る人のために電車賃と食事をセットにした宿泊券や日帰券を発売していた。

菅平は粉雪の日が多く、積雪は 1m内外が普通であるが、芝生の高原であるため僅かな雪量でも滑走できる点が特徴であった。本パンフレットは、やがて、スキーリゾートとして有名になる菅平の草創期を知る一葉といえよう。

まとめ

昭和初期、信越地方は我が国有数のスキー地であった。明治 44 年 1 月、レルヒ少佐により新潟県高田に導入されたスキーは、またたく間に各地域に伝わり、大正から昭和初期にかけてスキー倶楽部の発足、スキー場の整備と相俟って大いに普及する。すでに明治期に鉄道が開通していた信越本線沿線には多くのスキー場が設置された。新潟県では昭和初期、妙高山麓の赤倉、妙高、池ノ平、関、燕の諸温泉が冬はスキーヤーの雲集するところとなっていた。長野県ではスキーが高田から飯山、野沢温泉へ早い時期に伝わるが、昭和初期、飯山に代わって野沢温泉が関西・東京方面から多数のスキーヤーを集める日本有数のスキー地として知られるよう

になった。豊富な温泉が湧出し、旅館の収容力・設備に勝っていたからである。昭和に入ると志賀高原や菅平高原が開発され、交通機関の整備に伴い、それらが著名なスキー地として賑わうようになった。昭和 10 年、妙高高原、志賀高原、菅平高原が鉄道省国際観光局の国際スキー場に指定されるや、その名を不動のものとした。

以下、本稿で取り上げた観光パンフレットの特徴を整理して、まとめとしたい。

スキー熱の高まりに呼応して、昭和初期、鉄道省によりスキー場案内の各種パンフレット・小冊子が発行される。これらは、昭和初期のスキー場の分布、変遷、特徴等を知るための手がかりとなる。「スキースケート場一覧」（名古屋鉄道局、昭和 3 年 12 月）〈資料 1〉は、スキー草創期の気分が伝わる一枚である。「スキーは橇やかんじきと同じく踏雪具の一種で、これを以て雪上を自由に滑走する道具であります」と、そもそもスキーとは何ぞや、からはじめる啓発的内容に驚きを覚える。そして、スキーが爽快にして滑走容易であることを強調する。「中部日本スキー場案内」（名古屋鉄道局、昭和 5 年 11 月）〈資料 2〉は、アールベルグスキーテクニックの解説文が掲載されている点が特筆される。アルペンスキーの父として仰がれる H・シュナイダー来日（昭和 5 年 3 月）後の登山スキー熱の高まりをうかがい知る冊子である。「スキーへ」（鉄道省運輸局、昭和 4 年 12 月）〈資料 3〉は、全国各地の主要スキー場 27 か所が掲載された 74 頁の冊子で、各スキー場の概要・交通・スキー季節・旅館・練習場等の案内文があり、充実した内容構成となっている。

「高田スキー場案内」（高田市、昭和 5 年頃）〈資料 4〉は、「高田はスキーの発祥地」と題する一文からはじまる小パンフレットであるが、スキー伝来以後、高田市は競技会、巡回講演、指導員派遣、スキー大学等を開催してその発展に努めていたことを知ることができる。また、「高田は何故スキーの好適地か」という 12 のコメントが挙げられ、興味を引く。そこには、レルヒ少佐折紙つきのシャンツェとスロープがあって、優れた指導者がいる。また、スキーの購入や、修理も簡単にできる。スキー場は市街地から近く、交通至便で風景もよい等々、高田の金谷山スキー場のあらゆる利点が謳われている。

「妙高山麓のスキー」（池の平・妙高・新赤倉・赤倉温泉、昭和 7 年頃）〈資料 5〉は、赤倉・妙高・池の平・新赤倉の四温泉が共同で発行したパンフレットで、妙高山麓のスキー場の様子を知ることができる。当時、この四温泉は、貸スキーを各旅館に 40～50 挺ずつ揃えるとともに、宿泊料金を三段階に統一して誘客を図っていたことを知ることができる。

「野沢温泉名勝案内」（長野電鉄沿線案内刊行会、大正 15 年）〈資料 6〉は、野沢温泉を含む長野電鉄沿線の鳥瞰図を主に、裏面に「野沢温泉遊覧案内」の解説文を掲載する。野沢温泉は、風景が素晴らしく、俗世間から離れた地であることを称えるとともに、近年、スキー場として評判が高い、と記す。また、鳥瞰図には志賀高原開発以前の平穏温泉周辺の姿も描かれており、野沢温泉、志賀高原がこれからスキー地として躍進を始める直前の状況を知ることができる恰好の資料である。

「平穏スキー上林」（長野電鉄、昭和 4 年）〈資料 7〉は、昭和 4 年に「志賀高原」と命名さ

れた地をスキーの好適地として売り出すために電鉄会社が作成したもので、世界的スキー選手や宮様の来訪を取り上げて、志賀高原の名を大々的に宣伝する。すなわち、スイスのサンモリッツ冬季オリンピック（1928 年） のノルウェーチーム監督を務めたオラフ・ヘルセット中尉が志賀高原を縦横に滑走して発した言葉「ここは東洋のサンモリッツであります」を引き合いに出すとともに、秩父宮雍仁親王来遊を取り上げて志賀高原の宣伝に供するのである。

「長野電鉄沿線御案内」（長野電鉄、昭和 12 年）〈資料 8〉は、金子常光が描く鳥瞰図を主体としたパンフレットで、志賀高原が鉄道省の国際スキー場に指定（昭和 10 年）された 2 年後の発行である。琵琶池、丸池、蓮池、大沼池、長池、小池、三角池などの湖沼が点在する志賀高原には、上林ホテル経営の丸池ヒュッテをはじめ志賀高原温泉ホテル、志賀ヒュッテの宿泊施設が建ち、多くのスキー場がつくられており、開発がすすんだ志賀高原の姿をその鳥瞰図から読み取ることができる。また、志賀高原は、スキーのみならず新緑のハイキング、夏の登山・キャンプ、秋の紅葉と四季折々の魅力があり、婦女子でも容易に行くことができる、と志賀高原へ誘う。

「スキーの菅平と鹿沢」（上田温泉電軌、昭和 9 年）〈資料 9〉は、上田から電気軌道が真田まで全通し、菅平がスキー地として発展し始めた頃を窺い知るパンフレットである。パンフレットには、「雄大なスロープは、雪の王者シュナイダー氏がスキスのシュワルツ・ワルドに彷彿たりと激賞した所である」と謳う。近代スキーの生みの親といわれる H・シュナイダー来日に伴い、菅平において講習が開かれ、根子岳山頂から滑りおりる模範滑走が行われた。その世界的スキーヤーが激賞した菅平である、と強調するパンフレットである。

明治末期に我が国に伝来したスキーは、大正から昭和初期にかけて鉄道沿線のスキー地の開発に伴って急激に普及し、大いに隆盛をみたことを、各種パンフレットから読み取ることができる。

謝辞

本稿の執筆にあたり、藤井務氏（故人）の旧蔵コレクション資料を寄贈いただくとともに、関係資料の提供・ご助言をいただいた安藤典子氏に御礼申し上げる。また、本稿は、愛知淑徳大学研究助成「自然公園を対象とする観光文化に関する基礎的研究（No18TT26）」（平成 30～31 年度）の研究成果である。助成金を活用して、調査研究の一環として本稿で取り上げた信越地方の観光資源の現況を見学できたのは、得難い経験であった。記して、研究費をいただいた大学当局に感謝申し上げる。

注

[1] 谷沢明「観光パンフレットに見る昭和初期の観光地に関する一考察（1）日光・箱根―藤井務旧蔵資料を中心にして―」（『愛知淑徳大学論集―グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科篇』第10号、2018年、所収）。谷沢明「観光パンフレットに見る昭和初期の観光地に関する一考察（2）富士・箱根―藤井務旧蔵資料を中心にして―」（『愛知淑徳大学論集―交流文化学部篇』第8号、2018年、所収）。谷沢明「観光パンフレットに見る昭和初期の観光地に関する一考察（3）東京近郊―藤井務旧蔵資料を中心にして―」（『愛知淑徳大学論集―グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科篇』第11号、2019年、所収）。

[2] 藤井務氏は、昭和21年（1946）の復員後、日本交通公社に40年間勤務された方である。その後日本交通公社の文化課長、調査部次長を経て、公社関連の琉球総合開発株式会社の常務取締役となって沖縄の本土復帰直後の沖縄ハーバービューホテルの運営に当られた。後に創立にかかわった日本ユースホステル協会の理事長に就任している。同氏は若い時から地理や旅行が好きで、入社するまでにほぼ全国を旅行し、各地の山などにも精力的に登っており、戦前から、行く先々で観光パンフレットを入手していた。

[3] 鉄道省『日本案内記中部篇』昭和6年、ｐ70～74

[4] 鉄道院『鉄道旅行案内』大正7年、ｐ318～335

[5] 鉄道省『鉄道旅行案内』大正13年、ｐ278～291

[6] 乗鞍岳は、「松本駅乗換筑摩電鉄線島々駅（三十四粁）途中前川渡迄乗合自動車あり、前川渡より番所を経て鈴蘭小屋付近はスキー場としてもよい」と記す。

[7] 白馬岳は、「松本駅乗換信濃鉄道線信濃大町駅乗換大糸南線神城駅（三十粁）四ッ谷の白馬館へ登山準備の申込をすれば宿舎、案内等準備して呉れる」と記す。

[8] 立山は、「富山駅乗換県営鉄道線千垣駅（二十八粁）藤橋にて準備して室堂に到りて泊る、室堂は予め立山登山組合に申込まれればよい。登山準備は登山組合でして呉れる」と記す。

[9] 白山は、「西金沢駅乗換白山電鉄線鶴来駅乗換金名鉄道線白山駅（二十六粁）市ノ瀬温泉に到り準備して登る、室堂にて宿ることも出来るが食料はない」と記す。

[10] 木曽駒ヶ岳は、「木曽福島駅上松駅（十七粁）木曽福島より川上鉱泉に到り準備して登れば日帰り出来る。川上鉱泉付近は木曽福島スキー場がある」と記す。

[11] 前掲3、ｐｐ72～73.「山岳スキーとしても立山付近、乗鞍、白馬、薬師付近の如き約十ヶ月間のスキー期を有し、雄大なスロープを有して、逐年登山者の来訪漸次増加する勢である」と記載。

[12] 前掲3、ｐ401

[13] 中浦皓至『日本スキー・ほんとうの源流』レルヒの会、平成22年、ｐ16

[14] 前掲3、ｐ395～397

[15] 妙高高原町『妙高高原町史』昭和61年、ｐ770～ｐ773

[16] 「妙高山麓のスキー」略図のスキーコースの一つは、妙高山の背後に聳える火打山、焼山から杉ノ沢を経て池ノ平、赤倉へ至るもので、池ノ平から妙高へ、赤倉から新赤倉方面へ延びる。もう一つは、田口駅（現、妙高高原駅）から長範山の尾根伝いを往くものである。

[17] 前掲15、ｐ770～ｐ773

[18] 前掲3、ｐ391～392

[19] 前掲3、ｐ388～389

[20] 前掲3、ｐ374～375

[21] 「長野県スキー発祥100年の歴史 - 長野県スキー発祥100周年記念制作 - 」Web版

[22] 名古屋市博物館『NIPPONパノラマ大紀行』（展示図録）平成26年、ｐ114

[23] 前掲21